

---

# 南から吹く風

松谷ソウイチロウ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

南から吹く風

### 【Zコード】

Z6209B

### 【作者名】

松谷ソウイチロウ

### 【あらすじ】

僕達が経験した南の島での記憶。若者15人が織り成す2週間の夏物語が始まった。

## 第一話・出発の風景

空港に降り立つた瞬間、時間の感覚が無くなつた。

ゲートの奥から覗く空は辺り一面真っ暗なのに、南の島特有の鼻をつく氣だるい匂いと

ねつとりとべたべたする湿り氣に圧倒されて時間が止まつたような錯覚に陥つた。

到着予定時刻は午前2時だったはずで、ポケットにある携帯電話を覗いてみたが、そもそも時差がどれくらいあるのかわからなかつたから一瞬見てすぐに後悔した。

ここで生きるのかあ、と思つた。

仲間がたくさんいるとはいえ、それでも胸は不安で一杯だつた。

思わず生睡をぐくりと飲んで辺りを見回したが、少なくとも不安を微塵も抱えていない人間は一人もいないようで、そのおかげでやけに安心した。

映画ならここで、「今からこの場所でサバイバルをやってもらいます。」と始まり、人がたくさん死ぬ訳だが、僕らはここでサバイバルをやりながら全員が生き残らねばならないという過酷な条件を与えられた訳だ。現実の僕達に有利なのは、そのことが事前に知らされていたということと突然180度開き直つて連續殺人を犯しそうな人間が傍目にはいなさそうということだけである。

成田を出発したのは、前日の朝10時頃だつた。

15人もの大所帯が、リゾート地としては有名ではない南の島に行くからには、

最初からたくさん試練が待ち構えていた。

まずリーダーである僕が、集合時間に遅刻した。正確には、集合時間である8時10分にちゃんと着いてはいたのだが集合場所がよく

わからなかつたのだ。そのため10分ほど合流に遅れた。が、それは、まだましな方だつた。

一人は必需品だと言われた雨具が見当たらないと言つて、背丈まである真縁のリュックサックをひっくり返していたし、ある一人は前回旅行中に残つたトラベラーズチェックがまだ使えるのかどうか気にして、見当違いにインフォメーションのお姉さんに質問していたし、またある一人は今時の女子大生が着るに似つかわしくない、真ん中に丸いプリントの入つた真黄色のトレーナーをさも当然かのように着こなしていた。

とどめを刺したのは、一番まともだと思っていた若紳士の本多さんが、大寝坊をして、慌ててタクシーで駆けつけ離陸直前になつて、ギリギリで現れたことだ。

そんな訳で、出発した辺りから僕達15人は少し疲労していた。15人が全員初めて訪れる南の島へのわくわく感は、こんなんで俺達大丈夫かという不安に早々と取つて代わられた。

一人気丈だったのは先生だけで、離陸するなりアメリカ人のキャビンアテンダントに対して、

ぶつくさと文句を言つていた。

飛行機は、グアムを経由した後、パラオで一度出国し長い休息となる乗り換え時間を過ごし、それからまた飛行機で、目的地である南の島につくことになつていた。

飛行機は全員ばらばらのシートに座つた。僕はたまたま知り合い同士で隣になつたが、普段からそんなに喋らないのと、初めて乗つた飛行機での緊張感のためにさつさと寝ることにした。時折、飲み物を聞きに来るキャビンアテンダントに対し、本当は水が良かつたのだけれど、ネイティブへは「ウォーター」では通用しなく「ワラ」というくらいが丁度良いという実しやかな噂に自信が持てなく、くぐもつた声で「オレンジ、ブリーズ」と答えるはめになつたのには

閉口した。

透明なプラスチックのコップに注がれたオレンジジュースは、いかにも甘つたるくて、自分が外国に来ているのだということをまざまざと思い知らされた。このジュース100%じゃなくて120%くらいあるだろう、と面白くも何ともない冗談を隣の女の子に言おうとしたら、首を右に傾けるようにしてすやすやと寝息を立てていたので、拍子抜けして僕も再び眠りについた。

一旦、外に出たパラオでは既に空気が生暖かくて、外国初心者の僕は入り口ゲートをうろついてする男性が全てスリか詐欺師かに見えて困った。

そこでみんなは各自好きなことをして時間をつぶし、飛行機が来るのを待つた。

仲の良い二人組みの女の子は、こんな時でも日本に置いて来た彼氏が気になるらしく、ずっと小さな恋の相談室を開いていた。

男共は小さなレストランの奥まった所にあるわずかなスペースにずかずかと踏み入って、

我先にとリュックサックを枕にして雑魚寝していた。

僕はせっかく来たのだからと空港の周りを散歩しようとしたが、目的地に着くまでに通り魔に襲われて殺されたらあまりに無様でかつこ悪く無礼であるとさえ思つたので、集団から田の畠く範囲を何度も確認するようにながら夜の景色を楽しむことにした。

じめじめとした空気が全身を覆い、体中が徐々に腐っていくのではないかと思つた。

空を見上げたけれど、星はまばらにしか見えず、なーんだがつかりして下を向いた。

……この場合、初めての外国旅行はパラオということになるのだろづか。

と、ふいに疑問を持った。

それも悪くないと納得してみたが、そこまで几帳面になる必要はない

いと感じた。

それは、あまりの完璧主義者で、ファーストキスの相手を聞かれて、「母親」と答えるような、割り切れない合理性に似ている。

ふいに、「あの人も同じ空をみているのだろうか。」とセンチメンタルな気分に浸ろうとしたが、そもそも思い慕う女性がいないことに気がついて、我ながら興冷めしてしまった。

体は、半日に及ぶ移動でくたくただが、ここで眠るのは気が引けた。

中学校で親しかつた神保君が、「修学旅行のバスで寝るやつはただのかつこつけだ。」

と息巻いていたのが、何故か本心を見破られたように悔しくて、あれから7年経つた今も・それ以来集団行動ではできる限り寝ないことを心がけてきた。

さつきの飛行機で寝たことを思い出したが、あれは朝早かつたから仕様が無いと、笑った。

あくまで努力目標に過ぎない。破つても何か罰せられる訳では無い。二酸化炭素排出を削減できない日本の企業と変わらないといついじつけだ。

南の島に着くまで、あと5時間を切っていた。

パラオからの飛行機では、現地の言葉を勉強し、リーダーとして始めに行う挨拶の文面を考えていた。最初だけ、現地の言葉で挨拶し、その後は日本語で良いと先生に言われた。

向こうの人は、少しだけ日本語を理解できるといふのは事前に知らされていたことだ。

でも、それなら全部日本語で良いんじゃないかと思ったが、声にはださず、口をつぐんだ。

きっと韓流スターが、最初の一言だけ丸暗記で「こんなにちわ。私はです。」といふのと同じだろ。飛行機は、まもなく着陸する。

まもなく、サバイバルの2週間が始まろうとしていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6209b/>

---

南から吹く風

2010年12月21日03時07分発行